

徽州方言の言語地理的研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-06-28 キーワード: 作成者: 胡, 貴躍, Hu, Guiyue メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/00051236

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



学位論文要旨

Dissertation Abstract

学位請求論文題名 Dissertation Title

徽州方言の言語地理的研究

(和訳または英訳) Japanese or English Translation

Linguistic Geographical Research on Huizhou Dialect

人間社会環境学

専攻 (Division)

氏 名 (Name)

胡貴躍

主任指導教員氏名 (Primary Supervisor)

岩田礼

(注) 学位論文要旨の表紙

Note: This is the cover page of the dissertation abstract.

Summary

Applying the method of linguistic geography, this thesis investigates the historical formation of Chinese Huizhou dialect. Twenty-three phonetic and lexical items are selected and their linguistic forms are mapped respectively. The analyses of each map indicate that word form or phonetic feature shows six types of geographical distribution, such as ‘AB’ type and ‘ABA’ type.

The present author argues that external influence played a significant role in the formation of geographical distribution pattern and diachronic change of word forms and phonetic features. Lexical and phonetic features of three dialect groups, Jianghuai (江淮), Wu (吳) and Gan (贛), passed into Huizhou region from four directions, and their intrusions boosted the Huizhou dialect to change. Suppose that prior to the intrusions of external dialects, only form A prevailed in Huizhou region. Then, if the Jianghuai form B intruded into Huizhou, ‘AB’ type distribution would emerge. ‘ABA’ type could be the result of the intrusion of the same form B coming from two directions, i.e. northeast and northwest. If lexical forms in northeast and northwest were different (e.g. B and C), and they passed into Huizhou region at the same period of time, ABCA type of distribution would be likely to arise.

Meanwhile, internal factors, such as folk-etymology and syllable deletion, and other factors that are not relating to linguistics, such as natural geography, may also have triggered some changes to readjust the geographic distribution of Huizhou dialect.

要旨

本論文は、中国の徽州方言を対象として、主に言語地理学的方法によって音声、語彙の通時的変化の様相を明らかにすること、並びに当該方言の歴史的形成の原因を探求することを目的とした。

本論文の対象地域は、長江南岸の安徽省、江西省、浙江省三省の境界地帯に位置する旧徽州府である。その領域は唐代の740年頃に定まって以来、1934年に婺源県が離脱するまで千年ほどほぼ一定していた。第1章では徽州の地理的位置、行政区画、水陸交通状況などを説明した。徽州は地勢的に山岳丘陵が中心であるため、陸路交通が不便である一方、多くの河川がここに源を発し、四方に流れているため、歴史的に水路交通が発達した。徽州には主に三つの水路がある。一つは、徽州に源を発する新安江から東部の錢塘江に沿って杭州に至る徽杭水路、二つ目は、徽州南西部から江西省の鄱陽湖に至る徽鄱水路（閩江と樂安江）、三つ目は、徽州北西部から長江沿岸の安慶、池州に至る徽池水路（秋浦河）である。

第2章では徽州方言を対象とした先行研究を紹介した。1988年出版の『中国語言地図集』が徽語を中国の十大漢語方言の一つと認定して以来、徽州方言に関する研究が次第に盛んになってきた。平田昌司編『徽州方言研究』（1998年）は徽州の主要地点方言を記述した代表的な研究成果であったが、その後も各地点方言の音声・音韻特徴に関する記述研究が増えつつある。しかし、語彙や文法についての研究は少ない。従来の研究は、全体として、歴史音韻学の枠組みに基づいて音声を記述し、通時的変化を論じたものが多く、複数地点を対象とした研究でも、言語地理学的観点から変化を論じたものは非常に少ない。

第3章では研究目的と研究方法、及び研究資料の収集方法を説明した。本論文の目的は、語彙と音声に関する方言地図を作成し、方言形式の地理的分布に基づいて、変化の過程と変化の成因を推定することである。特に徽州と周辺の方言の関係を考慮し、言語変化をもたらした歴史、地理など非言語要因を論ずる。この目的を達成するため、筆者は4回にわたるフィールドワークを実施した。本論文では90地点で得られた資料を使用する。この他、第2章で挙げた調査研究から15地点の資料を選び、計105の地点方言を対象とすることとした。次に、音声、語彙に関する23項目を選び、それぞれについて方言変異形を分類した上で、24枚の方言地図を作成した。地図作成には、地理情報処理ソフトウェアArcView3.0を使用した。

第4章では、23項目の地理的分布の実態に基づいて、AB型分布、ABA型分布、ABAB型分布、ABAC型分布、ABCA型分布、多系型分布という六つの分布パターンに分類した上で、

各分布パターンがなぜ、どのように形成されたのかを考察した。23項目のうち、音声は6、語彙は17である。

(1) AB型分布

この分布パターンでは、休寧県と歙県・徽州区の県境を等語線が通ることが多く、この境界線を“休歙線”と呼ぶ。変化はこの境界線の東側で先に発生したものである。

“ソラマメ”と“昨日”は江淮官話から、“月”は呉方言から、それぞれ新語形「蚕豆」, 「昨朝」, 「月亮」を受け入れた。一方, [fu], [xu]の合流と「猴」の介音[i]の発生・口蓋化は、いずれも発音負担の軽減化による音声変化であるが、南京や杭州などの江南地区との言語接触によって、この変化が抑えられている地点もある。要するに、AB型分布が形成された原因は、当該語形や音声形式が南京（江淮官話）や杭州（呉方言）などで優勢であること、それらが頻繁な言語接触により徽州東部地域にもたらされたためである。

(2) ABA型分布

この分布パターンには、古形式が当該地域内の中部に保存された「ABA型分布1」と、古形式が当該地域内の両端や周縁に保存された「ABA型分布2」がある。後者はいわゆる“周圏分布”であり、前者は“逆周圏分布”である。

「ABA型分布1」の“拾う”と“見る”では、東部地域が江南地区からの新語形「拾」, 「看」を受け入れた一方、西部地域は北の秋浦河や美溪河を通じて、或いは西南の江西省から、東部と同様の語形を受け入れたとみられる。その結果、古語形が挟み撃ちされてABA型分布となった。“「宝飽」の韻母”は連鎖推移による音声変化であるが、「宝飽」を区別する地域は、安徽省、江西省、浙江省の三省の細長い境界地帯に分布し、新しい音声形式が徽州の両側から伝播してきたことを示唆している。要するに、「ABA型分布1」の形成原因は、新語形や新しい音声形式が長江南岸の安徽省安慶地区から江西省に至る広い地域に分布し、それが徽州の両側から伝播してきたことである。

「ABA型分布2」の形成原因は、徽鄱水路の下流地域、つまり江西省北部（贛方言区）で勢力を持つ語形が閩江や楽安江を通して徽州に伝播してきたことである。“母屋”と“トンボ”では、いずれも江西省から徽鄱水路（閩江と楽安江）に沿って伝播してきた新語形（「庁」系と[kɔ kɔ]系）が、もとあった語形（「堂前」系と「蜻蜓」系）を分断した。“寝る”は特例で、新語形の「睡」が南京一帯から南下した後、徽州北東部の績溪県を飛び越えて中心部の歙県に伝播したと考えられる。このような“飛び火伝播”は歙県が徽州の経済的中心地であることに因るものである。

(3) ABAB型分布

形成原因は「ABA型分布1」と似て、徽州の両側、即ち東部、北東部、及び北西部から新語形が徽州に侵入したことである。「ナス」では、「茄」系は江蘇省の南京市から徽

州北西部の安慶市一帯に至る長江南岸地域で強い勢力を有する語形であり、それが南下して徽州に侵入したと考えられる。

(4) ABAC型分布

“鼻”の分布は、呉方言の語形「鼻頭」が徽州の東部に侵入する一方、安慶市一帯で優勢であった語形が南下して祁門県に侵入したことによって形成されたと考えられる。

“ミミズ”と“台所”の分布は、“トンボ”でみられる「ABA型分布2」から昇格したようなものである。新語形の[khuaj khuε]系と「厨下」がいずれも徽鄱水路（閩江と樂安江）に沿って祁門県と婺源県に侵入した結果ABA分布が形成されたが、旧語形Aが単なる無縁記号であったため、“ミミズ”は歙県で、“台所”は婺源県で、それぞれ民衆語源により新語形Cが生まれたと考えられる。

(5) ABCA型分布

“ジャガイモ”では、東部から徽州に侵入した新語形「洋芋」系が歙県周辺の「馬鈴薯」を駆逐できず、休寧県の「馬鈴薯」と妥協して混淆形の「馬鈴芋」を生んだ。つまりABA分布のBから新しい語形Cが生まれたことになる。“サツマイモ”は、東部で南京などの江淮官話から「山」系語形を受け入れた一方、西部では安慶市一帯の江淮官話から「紅」系語形を受け入れた。

(6) 多系型分布

この類型は上記のいくつかの分布パターンの重ね合せであり、その成因も各種分布パターンの成因が重なったものである。例えば、“父の兄の妻の対面呼称”については、東部では“鼻”と同様に呉方言からの新語形を受け入れた一方、南部では“トンボ”と同様に樂安江を通じて贛方言からの新語形を受け入れた。その他、多系型分布には明らかな規律がない分布もある。それは方言の内在的要因による変化と関係が深い。例えば、“父の妻”を「姨」などと改称して分布が攪乱されているのはその典型的な例である。

第5章では、上記の分布パターンの成因をまとめたのち、徽州方言で見られる等語線の東を観察し、方言境界線の形成要因と方言伝播の方式を検討した。

筆者は、様々な地理的分布の形成に貢献した最も重要な要因は外部方言の影響であったと考える。徽州方言に隣接する三つの外部方言（江淮官話、呉方言、贛方言）が四つの方向から徽州に入り、徽州方言を変化させた。江淮官話は徽州東北の徽寧古道や西北の徽池水路（秋浦河）などから、徽州に伝播した。呉方言は徽州東部から徽杭水路（新安江）などに沿って徽州に伝播した。贛方言は徽州西南部から徽鄱水路（閩江と樂安江）に沿って徽州に伝播した。東北方向から江淮官話の影響を受ければ、徽州でAB型分布が形成されやすい。同じく江淮官話が西北方向から侵入することもあり、その場合はABA型分布になる可能性がある。域外の東北と西北からB、Cの二つの語形が侵入すれば、元の語形Aの領域が分断されて、ABCA型分布が形成される。このように、徽州方言がそれをと

りまく外部方言から影響を受けたことが様々な地理的分布を決定している。

外部方言が徽州に入ると、まず域内にあった既存の同義語と衝突を引き起こす。これを“同義衝突”と呼ぶ。その帰結として、旧語の廃棄、混淆形の形成、意味分担の三つがある。また、外部方言の伝播によって同音衝突が引き起こされる場合もある。それを回避する手段としては、新成分の添加などがある。その他、外部方言からの新語形の導入が音韻変化と連鎖推移をもたらすこともある。一方、内的要因のみによって変化が発生することもある。この種の要因としては、民衆語源と音節の脱落が最も多い。それらは地理的分布に大きな影響を与えることもあるが、一般にその影響力は外部方言ほどではなく、副次的な要因として、地理的分布の調整に関与したと考えられる。

言語的要因のほかに、非言語的要因を考慮する必要がある。二本以上の等語線が通る所を等語線の束を十本描くことによって、徽州における言語伝播は、地理、政治、交通、経済などの要因によって制限を受けていることを示した。うち、山川に因ると考えられる等語線の束が四本あり、県境とほぼ一致する等語線の束が四本ある。徽州の行政区画がほとんど山川の方向に従っていることを考慮すれば、地理的要因の作用が最も大きいと言える。

最後に、新安江流域の村落の多くはほぼ同時期に新語形と接触するチャンスがあることを指摘した。これは「地伝い伝播」とは異なる言語拡散が進んだ可能性があることを意味している。それは「飛火伝播」とも異なる。おそらく新語形や新しい音声の特徴が短時間に広い地域に広がった後に、既存の語形と戦って勝利を取めたのであろう。このよう伝播方式が成立するためには、交通・運輸条件と外来の言語集団からの長期間の影響という二つの条件が必要だと考える。新安江水路はかつて言語伝播に最良の条件を提供したが、それは呉方言地域に通じている。浙江商人や徽州商人が浙江省と徽州を往来することで、絶えず呉方言の影響がもたらされたに違いない。

第6章は結論と余論である。現状では調査地点密度はなお高くなく、本論文に示した解釈は歴史の真相からはなおほど遠いかもしれない。今回の調査はほとんどが、相対的には交通の便がよく、アクセスが容易な村で行われたものである。バスが通じていない僻地の調査は今後の課題である。また、語形や音声形式の分類については、基準の取り方によって分布も変わってくるので、再検討が必要である。さらに、解釈には決定的な証拠を欠くケースもあり、もっと合理的な解釈があるかもしれない。今後も引き続き、調査研究を継続していきたい。

学位論文審査報告書

平成30年 2 月 5 日

1 論文提出者

金沢大学大学院人間社会環境研究科

専攻 人間社会環境学

氏名 胡 貴躍

2 学位論文題目（外国語の場合は、和訳を付記すること。）

徽州方言の言語地理的研究

3 審査結果

判定（いずれかに○印） 合格 ・ 不合格

授与学位（いずれかに○印） 博士（社会環境学・文学・法学・経済学・学術）

4 学位論文審査委員

委員長 岩田 礼

委員 加藤 和夫

委員 新田 哲夫

委員 高山 知明

委員 入江 浩司

委員

（学位論文審査委員全員の審査により判定した。）

5 論文審査の結果の要旨

本論文は、中国安徽省南部の徽州方言を対象とした調査に基づく言語地理学的研究である。徽州地区は域内に世界遺産に指定された霊峰、黄山を擁する山岳地帯であるが、清代には戴震、江永、程瑤田等の碩学を輩出し、また明清時代の徽州商人（新安商人）の商業活動はよく知られている。徽州地区の面積は、北陸三県のそれとほぼ相同である。この地域の方言は、官話方言、呉方言、贛方言に取り囲まれ、1970年代までは「性格の不明な方言」と言われてきた。1981年に平田昌司氏（現京都大学教授）によって休寧県の調査が行われ、1998年に平田氏を中心とする日中共同調査チームの研究成果『徽州方言研究』が公刊されるに至って、域内7県の県庁所在地の方言については音韻、語彙、文法の基本的な情報がもたらされた。一方、中国のアカデミーは1987年刊行の『中国語言地図集』において、徽州方言を中国の10大方言の一つと位置付けた。そのこともあって、徽州方言の研究に取り組む研究者の絶対数は決して少なくない。しかし、既刊論文の多くは単地点方言の音韻記述或いは徽州方言と周辺方言の関係を論じたものであり、域内において調査地点を結んで線となし、線をまとめて面となすという総合的研究は従来行われてこなかった。

本論文の筆者は、北京語言大学の大学院修士課程で、方言学と音韻学を学び、言語地理学的研究を志して本研究科に入学した。自身が徽州の出身であり、入学以来、毎年現地調査に出かけた。本論文で使用したデータは約90地点のものであり、調査地点密度は必ずしも高くないが、郷里とはいえ、交通の便の悪い山岳地帯という制約を考慮すれば、十分に及第点を与えることができる。入学当初は中国方言学の常道に従って研究を進め、その成果は研究科紀要に掲載された論文「中国・徽州方言の音韻的諸特徴」などに見られる。その後、言語地理学の方法を学ぶにつれ、「一語の歴史を再構成する」方法を習得した。研究科紀要掲載の「中国・徽州方言の“雌犬”とその地理的分布」はその実践例である。

学位論文執筆にあたっては、筆者独自の論文構成法を採用することとした。即ち、調査資料から語彙、音韻の23項目を選び、各項目について方言地図上に現れた“分布の類型（分布パターン）”を帰納し、類型ごとに当該の分布が形成された要因を考察するという方法である。分布の類型としては、AB型、ABA型、ABAB型、ABAC型、多系型等がある。言語地理学の研究論文で、調査地域内に等語線を引くという手法はよく見られるが、筆者の手法は独自のものである。これは、域内の方言差、地域差を明らかにしつつ、外部方言の影響を考察したいという筆者の意思の現れであった。

本論文は、第1章で徽州の地理、歴史、人口、交通状況等を紹介したのち、第2章で先行研究を紹介しながら、徽州方言全体に共通する音韻的特徴をまとめている。第3章で主に調査地点を紹介し（上記90地点のほか、既刊資料から15地点を補ったとされる）、第4章「徽州方言の地理的分布」において各分布類型の成因を項目ごとに多角的に検討している。この第4章は本論文の中核をなし、全体の3分の2の紙幅を占める。第5章は前章及論文全体のまとめであり、1枚の地図上に“等語線の束”を引くことで、域内の地域差を示すとともに外部方言の影響を考察している。

以下では第4、5章で展開された筆者の立論について論評する。まず“分布の類型”の認定は些か恣意的な点もあるが、それには触れない。より肝要な点は、例えばABA型分布の成因をどのように解釈するかという点である。一般に、ABA型分布（或いは周囲分布）は外側に分布する語形Aが古く、内側の語形Bが新しいとされる。筆者はそのような一般的解釈を適用できる場合もあるが、その逆であった場合もあると考える。例えば、徽州方言に語形Bがあったところへ、長江沿いの江淮方言からBの両側に新語形Aが伝播した場合である。具体例として、“拾う”を表わす語形の下記の分布がある。

拾 | 排 | 拾

このような例について、筆者は逆の可能性を検討しながら判断を下しており、論証の姿勢は概ね肯定できる。

筆者の立論のもう一つの特徴は、徽州における方言分布が、河川、山などの自然地理によって決まることが多いこと、並びに語形や音声特徴の水路沿い伝播を強調する点である。徽州は浙江省・杭州に通ずる新安江をはじめとして大小多数の河川が域内を流れており、水路沿いの言語伝播は本論文掲載のいくつかの地図によって確かめることができる。語形や音声特徴が地理的にどのように伝播していくかという問題の解明は古くて新しい課題である。筆者は、日本の学会で主流を占める村から村への地伝い伝播や中国で主流を占める移民による飛び火伝播のほかに、河川交通が伝播の重要な媒体であること、またその場合、外部から伝播した語形は短時間で一定の地域を覆うことを指摘している。これらは重要な指摘であると言える。

本論文については、審査委員会で様々な問題が指摘された。まず、筆者は方言の内的要因による変化をいくつか指摘しているが、全体として外部方言の影響にウェイトをおいているが、それは徽州方言の成立に関する先行研究をふまえた筆者の仮説に基づく所が多い。内的要因（民間語源、類推、類音牽引等）による変化の可能性を改めて検討した上でより合理的な結論

を導くことが望まれる。次に、声調や親族名称など体系性が問題となる項目については、体系の類型化と地図化を試みる必要があること、また音韻項目については比較言語学の一般原則をふまえた説明が必要であること等が指摘された。細部に互っては、例えば先行研究の書誌情報は、後出の論文集などではなく、初出の論文をあげること、地図上の河川や県名などが読み取りにくいこと等が指摘された。

このようになお改善すべき点は少なくないものの、在籍中の方言調査によって多数の未調査地点を含む大量のデータを蓄積し、それらを筆者独自の整理方法によって類型化、地図化してみせたこと、並びに各地図について複数の解釈を検討することで地図解釈の恣意性を低めようとしたこと、これらの努力は評価されるものである。中国の方言学会では、現在、言語地理学が普及しつつあるが、方言地図の読み取り方、解釈の方法については実践訓練を積んだ人材がなお少ない。筆者が帰国後も研究を継続し、斯界で指導的役割を果たすことが期待される。

以上のことから、本論文が学位論文としての水準に十分に達していることを委員会全員一致で認めた。